



小郡市のあらまし

位置と地勢

小郡市は、福岡県の南部、筑紫平野の北、佐賀県との県境に位置しています。南東を大刀洗町と久留米市に、西は佐賀県、北東は筑紫野市と筑前町にそれぞれ接しています。東西6キロメートル、南北12キロメートルにわたる区域で、総面積は45.51平方キロメートルあります。

東北の台地には標高130.6メートルの花立山があり、西北丘陵地帯は、なだらかな丘陵が連なり、ため池が点在しています。

また、市の中央部を南北に貫流する宝満川を挟んで、西側に住宅地帯、東側に田園地帯が広がっています。

沿革

小郡市の歴史は古く、弥生時代の三沢遺跡や花立山古墳群をはじめとした数多くの遺跡・古墳などが散在し、日本書記には「筑紫小郡」と記されています。筑前、筑後、肥前の境界に位置し、大宰府にも近く、古くから交通の要衝であり、奈良時代には「御原郡衙（小郡官衙（かんが）遺跡）」が置かれました。その後、江戸時代には「薩摩街道」「彦山道」などが松崎周辺を通過し、宿場町として栄えました。

明治22年、町村制の施行により小郡村、三国村、立石村、御原村、味坂村が誕生。

昭和28年、小郡村が小郡町となり、昭和30年に小郡町、三国村、立石村、御原村、味坂村の1町4村が合併し、小郡町になりました。

そして、人口急増により昭和47年に市制を施行し、その後も、市北部の住宅開発などにより人口の増加が続き現在に至っています。

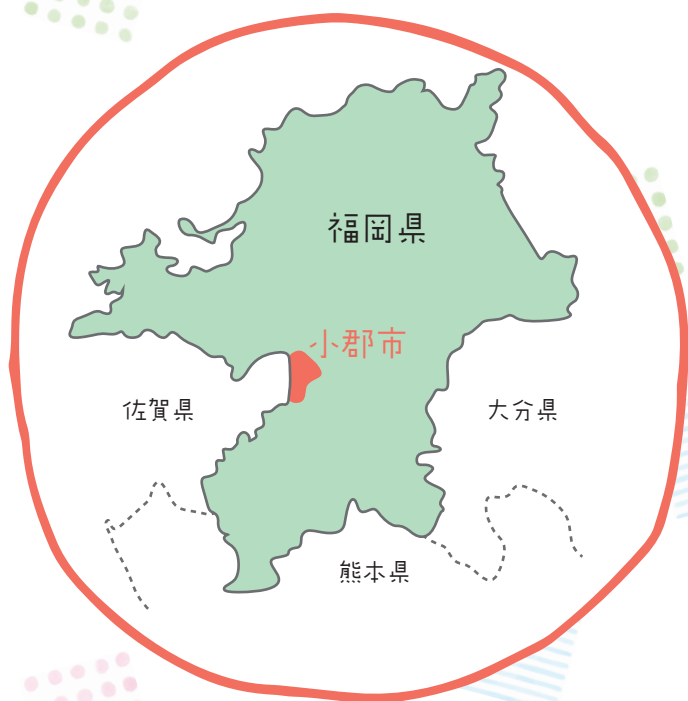
交通条件

市域を九州自動車道と大分自動車道の二つの高速道路が通り、市内に筑後小郡インターチェンジがあります。鳥栖ジャンクションまでもすぐの距離にあり、短時間で広範囲の都市との連絡が可能です。

また、市内を東西に走る国道500号を中心として、縦横に県道や市道などの生活道路が張り巡らされています。

鉄道は、西鉄天神大牟田線が市域を南北に貫き、小郡駅をはじめ7つの駅があり、東西に通じている甘木鉄道では5つの駅があります。

県都福岡市へは鉄道で30分の距離にあり、交通の便がよい都市です。



人が輝き、笑顔あふれる快適緑園都市・**おごおり**





市名「小郡」の由来

「筑紫小郡」の名は、持統天皇3年(689年)6月、新羅の使者金道那(こんどうな)を「饗応した」客館として日本書紀にみられます。

小郡市は、往古の筑紫平野の北に位置し、大宰府に近く、博多へ通じる交通の要衝を占め、小郡市中心部(向築地)からは当時の官衙跡が発掘され、「小郡官衙遺跡」として国の指定を受けています。その軍事的・地理的特殊性から、地方官庁所在地として小郡の地名が残り、今に伝えられています。

産業

農業は、小郡市の基幹産業ですが、農業を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。

農業を持続的に発展させるため農業の担い手育成と確保のほか、地産地消の推進や産地銘柄の確立、6次産業化の推進が課題です。

商業は、買い物客の市外流出や高齢化などに対応するため、西鉄小郡駅前の商業地の活性化や農業や観光などと連携した活性化に取り組んでいます。

工業は、筑後小郡インターチェンジ周辺や主要地方道久留米筑紫野沿線、鳥栖ジャンクション周辺を中心に事業所が立地しています。交通利便性に優れた地域であることから、特に物流拠点としての立地が期待されています。

観光は、将軍藤や味坂のポピー、花立山など四季折々の豊かな自然と豊富な埋蔵文化財など、自然資源や歴史資源と連携した観光振興に期待が寄せられています。

小郡市徽章

昭和34年10月15日に
条例で制定



由来

漢字の小郡の「小」を図案化したものです。

当時、小郡に多くいた鴨(かも)にちなんで鳥の形に「小」を図案化し、小円の中心から末広がりになった▲(円すい)は市政の発展を意味し、市の中心部の発展をしっかりと抱え込んで、市民の盛り上がる力を意図したものです。

また、円は円満を意味しています。

市の木・花・鳥

昭和57年、市制施行10周年を記念して制定



市の木 くすのき

水と緑、豊かな自然を象徴するかのように、大地にしっかり根を張りたくましくのびています。

市勢の発展、伸びゆく小郡市の力強さ、たくましさ強く感じさせる木です。



市の花 ふじ

福童の大中臣神社にある県指定天然記念物「福童将軍藤」は小郡市のシンボルとして親しまれています。

樹齢650年以上、根元周囲は3メートルに及び、開花時には見事な淡い紫色の花を咲かせる上品で優雅な花です。



市の鳥 しらすぎ

小郡音頭にもうたわれ、市内随所に飛び交っています。

群れをなして飛ぶ光景は情緒があり、田園都市としての市の発展を見守っているようです。

